The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	批判的社会言語学の探訪　はしがき
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77081
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はしがき

本プロジェクトは『批判的社会言語学の諸相』（2002 年度）、『批判的社会言語学の可能性』（2003 年度）、『批判的社会言語学の射程』（2004 年度）、『批判的社会言語学の展開』（2006 年度）、『批判的社会言語学の課題』（2007 年度）、『批判的社会言語学の実践』（2008 年度）、『批判的社会言語学の展開』（2009 年度）、『批判的社会言語学の領域』（2010 年度）、『批判的社会言語学の方法』（2011 年度）、『批判的社会言語学の構築』（2012 年度）、『批判的社会言語学の展望』（2013 年度）、『批判的社会言語学の軌跡』（2014 年度）、『批判的社会言語学の潮流』（2015 年度）、『批判的社会言語学のまなざし』（2016 年度）、『批判的社会言語学のメッセージ』（2017 年度）、『批判的社会言語学の思潮』（2018 年度）の延長線上にある。また、『「正しさ」への問い－批判的社会言語学の試み』（野呂香代子・山下仁、三元社、2001、新装版 2009 年）、『「共生」の内実－批判的社会言語学からの問いかけ』（植田晃次・山下仁、三元社、2006、新装版 2011 年）、『ことばの「やさしさ」とは何か－批判的社会言語学からのアプローチ』（義永美央子・山下仁、三元社、2015 年）とも深い関連を持つ。さらに、2012 年度から全学的に開始され、山下が運営統括委員、植田がプログラム担当者に名を連ねていた「未来共生リーディングプログラム」とも関連を持つものである。

2002 年に開始された本プロジェクトの出帆より 20 年近い歳月が流れた。この間、幾多の論文・翻訳によって、上掲のように「批判的社会言語学」の「諸相」・「可能性」・「射程」・「展開」・「課題」・「実践」・「領域」・「方法」・「構築」・「展望」・「軌跡」・「潮流」・「まなざし」・「メッセージ」・「思潮」に取り組み、今年度は「探訪」をテーマとした。

2020 年 6 月現在、新型のコロナウイルス感染症（COVID-19）は日本を含めた世界中で猛威を振るい、人々の生活を一変させてしまった。各国は感染症対策として国境を閉じ、多くの国・地域で行動の制限が行われた。日本では行動の自粛が呼びかけられるとともに、同調圧力と相互の監視が行われ、「自粛警察」なる語が生まれたことは記憶に新しい。新たな感染症は社会の格差を改めて認識せしめただけでなく、今後さらなる格差拡大の要因ともなりうる。激動する社会を「言語」と「社会」の関係からいかにして我々は「探訪」できるであろうか。本プロジェクトは、このような現代社会を社会言語学の立場で、研究者それぞれのテーマから「探訪」し、批判的に捉えようとするものである。

柳田論文は、ポライトネス研究と批判的談話研究を批判的に精査し、その問題点と限界を指摘しつつ、やじとそこから展開される相互行為についての考察と分析を試みた。国会での安倍首相による辻本議員に対するやじと、いわゆる「道警やじ排除問題」を取り上げ、力を持つ者が力を持たない者のフェイスを侵害すると同時にその話す権利（社交性の権利）をも侵害する行為を、批判的社会言語学の観点からどのように分析することができるかについて論じた。

小川論文は、多言語社会ルクセンブルクでの公的な書き言葉にどの言語が選ばれるのかについて、小規模な自治体の広報誌の言語選択の点から論じている。従来は最も民衆に近い書き言葉としてドイツ語が選ばれる傾向にあったが、書き言葉としてのルクセンブルク語の普及とともに、公的な分野でもルクセンブルク語が幅広い分野で用いられる傾向にあることを示唆している。また、移民社会で共通語となっているフランス語の地位が盤石であり、ドイツ語が周辺化しつつあることも同時に示唆している。

2020 年、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大によって日常生活におけるさまざまな領域で多くの変化が生じた。山下の研究ノートは、この状況下で、現時点で考えられる問題の領域を明らかにし、メタ言語、関与性、批判的談話分析などをもとにそれらの領域における変化とその変化の連関を考え、どのようなテーマが批判的社会言語学の研究課題となるのかを考察しようとしたものである。

植田の研究ノートは、近年日本で発行された朝鮮語テキストに見られる朝鮮文字(＝ハングル)による日本語表記法の記述に規範が如何に反映されているか／いないかという点に着目して検討した。その結果、(1)規範に準じている場合、(2)規範の不備を補っている場合、さらには(3)規範不備に対する提案を行っている場合が見られ、テキスト執筆者が如何に規範を捉えているか／いないかを反映していることを示した。そして、外国語教育において言語事実と規範が両輪のように働くのではないかということを指摘した。

呉の研究ノートは、台湾閩南語の中に生きる日本語からの借用語に注目し、台湾人の閩南語における日本語に対する意識を調査し、その結果をまとめたものである。

読者の皆様からの忌憚なきご意見、ご批判などをお伝えいただけたら幸いです。

執筆者一同